

## モチモチの木

～作者の意図まで読みとろう～

国語部

岩井陽介

場所 3年西組教室

1. 日 時 平成19年11月30日(金) 第2時限(10:00～10:45)

2. 学年・組 第3学年西組(39名)

### 3. 研究課題

「ひらく」・「ふかめる」段階において、お互いの読みを交流することで児童の読みを深め、変容を実感することにつながるかを検証する。

### 4. 授業づくりの視点

#### (1) 教材分析

「モチモチの木」は、「おくびょう」な、豆太に同化して読みやすい。また、結びには、読者の読みを再考させる仕掛けがある。作者の意図や人間観も読み取ることができ、児童一人ひとりの読みをさらに深めることができる教材である。

「モチモチの木」は、冒頭の一文『全く豆太ほどおくびょうなやつはない。』から、分かるように、語り手によって、「豆太はおくびょう」と決め付けている構図がある。

夜中にはモチモチの木がこわくて一人じゃ小便もできないほど「おくびょうでみっともない」豆太が、いっしょに暮らしている大好きなじさまを助けるために、冬の真夜中、たった一人で遠く離れた医者様を呼びに行くと言う、とんでもないことをやってのける。

子どもたちは、豆太を応援する気持ちで、自分と重ねながら物語を読み進めるだろう。

お医者様と共に小屋へと戻った豆太は、「勇気のある子」しか見ることの出来ない、「灯のついたモチモチの木」を見るのだった。元気になったじさまは豆太に言った。

「おまえは勇気のある子どもだ。自分を弱虫だなんて思うな。」と。読み手である児童も同様に「豆太＝勇気のある子」と感じているはずだ。しかし、『それでも豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、「じさまあ。」と、しょんべんにじさまを起こしたとき。』で物語は結ばれる。この結びの仕掛けは、読み手である子どもたちを混乱させ、もう一度考えるように仕向ける。豆太はやっぱり「おくびょう」に戻ってしまったのか、それとも「勇気のある子」なのか。子どもたちは悩むことであろう。ここに作者の意図がある。作者は結びの3行からこの作品全体を読み返すことを要求しているのである。

豆太を「おくびょう」と決め付ける語り手の存在。「おくびょう」とは、「勇気」とは、「優しさ」とは何かという問い。この物語での「勇気」とは、語り手の言うように「一人で小便に行けること」ではなく、大好きなじさまのために泣きながら走った豆太を通して見える「家族に対する優しさ」であろう。ここには作者である斎藤隆介の人間観が

見える。この場面では、さまざまな授業展開が考えられるが、「冒頭文・結びの仕掛け」と「物語の中での勇気」を核にして授業を構築し、提案したい。

## (2) 児童の実態

国語でつきたい力は大きく4つに大別される。「読む力」「書く力」「話す・聞く力」「言語事項」である。その中で3年西組の子どもたちは特に「読む力」において力がある。

声に出して読む「音読」は、「わたしと小鳥とすずと」(リズムを楽しむ)や「三年とうげ」「ちいちゃんのかげおくり」(登場人物のせりふを工夫して)「すがたをかえる大豆」(素早くすらすらと)「モチモチの木」(暗唱に挑戦)など意欲的に取り組んでいる。また、学校全体で取り組む読書の時間も好きである。物語の情景・登場人物の心情の読み取りでは、登場人物に同化した読みの得意な児童も多い。ただ、3年生の学習段階において、まだ「異化した読み」についての取り組みはあまり実施していない。また、自分の意見を「話すこと」にも積極的な学級である。

「書くこと」においては、「どう書けばいいのか迷う」「答えに自信がない」と苦手意識を持つ児童もいた。そこで、例え自信がなく、まとまっていなくとも、自分の考えは、まず「ノートに書き記す」習慣をつけた。友だちの発表の中で、自分とはちがう、自分が「なるほど!」と思った、友だちの考えもノートに記述するようにしている。また、国語の心情の読み取りなどは、数多くの児童に考えを答えさせ、多様な考えをできるだけ認めるようにしてきた。次第に自分の考えを発表することに抵抗は少なくなっている。しかし、まだ自分の想像のみを根拠にした考えが多い。文中の表現を根拠にした考え方を定着させることが今後の課題である。言語事項に関しては各新単元での言葉の意味調べであったり、新出漢字での熟語作り・文作りの中で数多くの語彙を増やしている最中である。漢字については、書き順や「止め・撥ね・払い」についても意識させている。

今後は、児童同士での「話し合い」活動を通して、友だちの考えを聞き、自分の考えと比較する中で、さらに自分の考えを深められることを目指していきたい。

## (3) 指導にあたって

国語科の授業では、「読む」・「書く」・「話す・聞く」の基本的な活動を1時間の授業の中で全て組み入れた授業を計画したいと考えている。この「モチモチの木」の授業ではその中でも「話す・聞くこと」に重点化して行いたい。自分が挿絵や文章から「読み取ったこと」、さらに自分の考えやその理由を「書く」。ノートに「書くこと」で自分の考えをまとめる。そのまとめた考えを教室で交流する。「話す・聞くこと」で、友だちの考えと自分の考えとの違いにも気づき、さらに自分の読みを深めることができる。

「話し合う」ためには「聞き合う」ことが大切である。この単元では、話し合う・聞き合う活動を通して、場面情景や登場人物の心情の読み取りを深めることを目指す。

低中学年では物語文の世界に浸ることは非常に大きな意味を持つ。2年生の「スイミー」や「お手紙」。3年生「三年とうげ」では場面に応じてトルトリやおじいさんに同化して読み進めていくことで何度も峠を転ぶアイデアの面白さにつながってゆく。この『モチモチの木』においても「豆太と同化した読み」抜きには深い読みは得られない。

しかし、いつまでも主人公の気持ちに寄り添った読み方だけと言うわけにも行かない。3年生の物語文のまとめにあたる本単元では、文中にある構成の仕掛けや、込められている「作者の意図」についても考えさせ、自分の目を主人公の外側からの視点に置き換

える「異化」した読みの力も伸ばし、今後の物語文読解を深める一助とさせたい。

本時では物語の結び部分を扱う。この部分では物語構成・作者の仕掛けの面白さと共に、「勇気とは何か」、「優しさとは何か」と人間の本質を考えさせる展開も考えられる。

ここでは「物語の中の勇気」に焦点を当てる。考えの根拠を教科書の文中からつなげながら、自分の考えをまとめ、話し合わせることで「読み」の深まりにつなげたい。

## 5. 単元の目標

○進んで学習に取り組み、物語の情景や人物の心情・作者の仕掛けを考える。

(関心・意欲・態度)

○場面の移り変わりや情景を、叙述をもとに想像しながら読む。(読むこと)

○自分の考えが分かるように筋道を立てて、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話す。(話すこと)

○相手や目的に応じて、適切に書く。(書くこと)

## 6. 指導計画(全13時間)【本時7/13】

第1次 『モチモチの木』の全文を読み、学習の構えを作る。(1時間)

- ・ 教師の範読を聞き、学習のめあてを持つ。自分が面白いと感じた部分を交流する。

第2次 『モチモチの木』を読む。(7時間)

- ・ 「おくびょう豆太」では、主人公豆太の「おくびょうな」様子・じさまと二人きりで暮らしている場面設定をとらえる。『かわいそうでかわいかったからだろう』という表現から、じさまの豆太への心情を読む。
- ・ 「やい、木い」では、モチモチの木と豆太の関係を読みとる。豆太を「おくびょう」と決め付けようとする「語り手」の存在に気づく。
- ・ 「霜月二十日のぼん」では、じさまが豆太に語る「モチモチの木に灯がともる」の意味を理解し、話を聞いた豆太の心情を想像し読み取る。
- ・ 「豆太はみた」前半では、苦しんでいるじさまを見た時の豆太の心情を読みで表現させながら読み取る。とうげの下りの坂道を泣きながらもかける豆太の心情を読む。
- ・ 「豆太はみた」後半では、モチモチの木に灯がともった情景を読み、医者様の説明とじさまの話の違いを読む。「モチモチの木には灯がついたのか」と言うことについて、意見を交流する。
- ・ 「弱虫でもやさしけりゃ」を読む。 →【本時】
- ・ 豆太の性格や人柄を、場面ごとの心情を中心に振り返り、「豆太への手紙」を書く。

第3次 音読発表会をする。(3時間)

第4次 斎藤隆介の物語を読んでみよう。(2時間)

- ・ 『花さき山』、『八郎』、『半日村』などの斎藤隆介作品を読み、感想を交流する。

## 7. 本時について

### (1) 目標

- ・ 物語文の結びに込められた仕掛けや作者の意図を読み取る。
- ・ 話し合いを通して、自分と友だちの考えの違いに気づき、読みを深めることができる。

(2) 展開

|       | 児童の学習活動・反応例   | 指導上の留意点  | 評価の観点                              |
|-------|---|--|------------------------------------|
| かまえる  | <p>1. 「豆太は見た」を読み、「豆太が、夜道を一人で医者様を呼びに行った時のこと」を思い出す。<br/>(前時の振り返り)</p>   | <p>○本文を暗唱させる。<br/>○医者様を呼びに行った豆太の心情や情景を思い起こさせる。</p>   | 工夫して読んでいる。                         |
| のぞむ   | <p>2. 「弱虫でもやさしけりゃ」を読み、結び部分の仕掛けを読み取る。<br/>・「おくびょう豆太」に戻った感じがする。<br/>・豆太は勇気があるんじゃないかなかったのか？<br/>・豆太がおくびょうなのか勇気があるのかわからなくなる。</p>                                    | <p>○「豆太はそれから勇かんな子になりましたとき。」という仮想の結びと比較して考えさせる。<br/>○冒頭文「全く豆太ほどおくびょうなやつはない。」も想起させ共通点に気づかせる。</p> | 結びの仕掛けを読みとることができる。                 |
| ひらく   | <p>3. 豆太はおくびょうか、勇気があるのかを考える。<br/>・一人で小便できないからおくびょう。<br/>・夜中に一人で医者様を呼びに行くことができたから勇気がある。</p>  | <p>○どちらとも言いきれないことなので短時間でまとめ、次の展開につなげる。</p>   | 理由を付けて自分の考えを発表している。                |
| ふかめる  | <p>4. 「この物語での本当の勇気とは何か」について考え、話し合う。<br/>・大好きなじさまを助けるために夜中に医者様を呼びに行けたこと<br/>・「夜中に小便に行けること」ではない。<br/>・豆太は、じさまが死ぬことが怖くて夢中だったから、行くことができた。<br/>・「優しい」ってことじゃないかな。</p> | <p>○作者が考える「勇気」とは「一人で小便に行けること」ではなく、「家族に対する優しさ」をもとにしたものと気づかせる。</p>                               | 友だちの発表をしっかりと聞いている。相手に分かりやすく発表している。 |
| ふりかえる | <p>5. 学習の感想を書く。</p>   |  |                                    |

【参考文献】

『子どもの見方・考え方を育てる小学校中学年・国語の授業』（西郷竹彦著，明治図書 2005）